

教育における紙芝居の可能性を考えるⅡ

前 徳 明 子・正 司 顯 好・渡 邊 裕

Thinking of Possibility about the Educational Effect of KAMISHIBAI, Part 2

MAETOKU Akiko, SHOSU Akiyoshi, WATANABE Hiroshi

キーワード：教育的効果、紙芝居の特性、創り方、
演じ方、幼小連携

1 はじめに

紙芝居は幼稚園や保育所等さまざまな教育の現場で活用されている（鬢櫛ら 2010、正司ら 2015）。既存の紙芝居には対象年齢が想定されているものも多く、幼稚園や保育園においては社会性が育つ作品や想像力が育つ作品、興味の対象が広がる作品や言葉で考える力をつく作品などが多く演じられる。小学校や中学校においては、紙芝居の特性や作品のもつ意味（世界観や価値観）を理解した上で、仲間づくりや人権、平和学習などに用いる例もある¹⁾。また、国語や総合的な学習などの時間に紙芝居を創作し、言語学習やメディアリテラシー教育を目的とした実践も行われている（栗原 2002）。

しかし、紙芝居の実践研究はまだまだ少ないのが現状である。鬢櫛（2015）は紙芝居の歴史や文化的価値および教育紙芝居の現状と課題について論じ、保育学会等における紙芝居研究の数が依然として少ないことを指摘している。また、保育の現場においては場つなぎ的に紙芝居を用いるなど、紙芝居の特性を活かした活用がほとんど行われていないことが指摘されている（大元 2013、正司 2015）。幼稚園と小学校が連携して紙芝居を用いた教育活動の実践を行い、その教育的効果を議論した例はほとんど知られていない。

正司ら（2015）は、幼小連携教育を推進してい

く中でスムーズな連携を成功させるために紙芝居を導入し、紙芝居の特性、創り方、演じ方の理解を通して教育の在り方を考えるための紙芝居講座プログラムを考案した。さらにそのプログラムを小学4年生および5年生児童および幼稚園児に対して実践し、児童や担当教員への聞き取り調査をもとに紙芝居の教育的効果について報告を行った。

本研究では、正司ら（2015）の知見をもとに紙芝居の創作活動プログラムを改良し、小学校6年生の児童を対象に約1年間に渡って紙芝居講座の実践を行った。その中で児童たちは、「紙芝居を観る」、「紙芝居を演じる」、「紙芝居を創る」、そして「自作の紙芝居を演じる」という4つの活動を行った。最後の「自作の紙芝居を演じる」では、小学生高学年の生徒が自分の創った手作り紙芝居を、小学校低学年の児童や幼稚園の園児たちに対して演じるという活動である。さらに幼稚園の園児については、1枚紙芝居を作成して演じるこの実践や、親子を対象とした4枚紙芝居の創作活動の実践も行い、小学生と同様に4つの活動を行った。

これらの活動を通して、プログラムに参加した小学生の児童たちがどのように変容したのかを調べるために、児童に対してアンケート調査を行った。また、普段から児童の様子を良く知る小学校の担任の先生方や幼稚園の担任の先生方にインタビュー調査を行った。これらの調査結果を分析することにより、紙芝居のもつ教育的効果とその可能性について議論を行うことが本研究の目的である。

2 調査方法

2.1 幼小連携による紙芝居講座の実践

2.1.1 プログラムの立案と実施

小学生を対象とした紙芝居講座、および幼稚園児を対象とした紙芝居講座をそれぞれ計画立案した。その概要を以下に示す。

- (1) 実施時期 2015年4月～2016年2月
計6回の紙芝居講座（各約90分）
- (2) 対象者 埼玉県加須市立志多見小学校
児童33名（6年生）
埼玉県加須市立志多見幼稚園
園児13名（4歳児8名、5歳児5名）
- (3) 講師： 正司顯好、前徳明子（埼玉東萌短期大学）

また、これらの紙芝居講座に先立ち、小学校および幼稚園教職員向けの研修会を実施した。これ

らの研修会および講座のプログラム内容を表1に示す。

埼玉県加須市は、公立小学校の敷地内に公立幼稚園が併設されており、小学校の校長が幼稚園の園長を兼務している。また、小学校の教頭は、幼稚園の副園長を兼務しているという事情がある。このために、小学校と幼稚園が連携して活動を実践するには好都合な環境にある。

こうした環境下において、第1回は2015年4月に小学校と幼稚園の教職員による合同研修会を実施した。その後、小学校においては第2回から第7回まで計6回の紙芝居講座を行った。最初の4回で紙芝居を観る、紙芝居を演じる、紙芝居を創るといった活動を行い、5回目と6回目で自作の紙芝居を演じるという活動を行った。

また、併設の幼稚園においては3回の紙芝居実演会を行い、紙芝居の楽しさを伝えた上で、講座外の時間に親子による1枚紙芝居や4枚紙芝居の創作活動を行ってもらった。その後、2016年2月28日のお誕生会において小学生と合同で自作した紙芝居作品の発表会を行った。

表1 埼玉県加須市立志多見小学校・幼稚園における紙芝居創作と実演プログラム

回	実施時期	対象者	小学校での主な活動	幼稚園での主な活動
第1回	2015年4月 教員研修会	小学校教員および 幼稚園教員	教員研修「平成27年度 紙芝居による幼小連携プロジェクトについて」紙芝居による幼小連携プロジェクトについての概要説明と、教職員向けの紙芝居講座の実施	
第2回	2015年6月火曜日 5～6時限目（月 1回）	6年生 幼稚園児	紙芝居講座①「紙芝居を観る」作品を観て聴いて楽しむ（観客の視点から）	・「紙芝居を観る」紙芝居の実演を通して紙芝居の楽しさを伝える ・親子で紙芝居づくりの提案を行う
第3回	2015年7月火曜日 5～6時限目（月 1回）	6年生 幼稚園児	紙芝居講座②「紙芝居を演じる」作品を演じて表現力を身に着ける（演じ手・実演者の視点から）	・「紙芝居を観る」紙芝居の実演を通して紙芝居の楽しさを伝える
第4回	2015年9月火曜日 5～6時限目（月 1回）	6年生	紙芝居講座③「紙芝居を創る」作品を自分で創る（作家の視点から）	・「紙芝居を観る」紙芝居の実演を通して紙芝居の楽しさを伝える
第5回	2015年10月金曜日 5～6時限目 （月1回）	6年生	紙芝居講座④「紙芝居を創る」作品を自分で創る（作家の視点から）	・「紙芝居を創る」2月28日の発表会に向けて、親子で1枚紙芝居の創作や4枚紙芝居を創作する（講座の時間外に実施）
第6回	2016年2月金曜日 5～6時限目（月 1回）	6年生 1年生	紙芝居講座⑤「自作の紙芝居を演じる」自分が創作した紙芝居を演じる（小学1年生に対して）	
第7回	2016年2月28日、 幼稚園お誕生会	6年生 幼稚園児および 保護者	紙芝居講座⑥「自作の紙芝居を演じる」自分が創作した紙芝居を演じる（幼稚園児に対して）	お誕生会において、親子で創作した紙芝居の発表会を行う（幼稚園児、小学生に対して）



図1 志多見小学校6年生児童が自作した紙芝居を演じる様子



図2 志多見小学校6年生児童が自作した紙芝居を幼稚園児およびその保護者の前で実演する様子

2.1.2 アンケート調査

全6回の講座実施後に、志多見小学校6年生児童を対象にアンケート調査を実施し、33名の有効回答を得た。アンケートの質問項目を表2に示す。質問内容は4つのカテゴリに分かれており、計9つの質問に対してそれぞれ3件法で回答を得た。また、それぞれの質問項目に対して、その理由を記述するための自由記述欄を設けて回答を得た。

2.2 担当教員へのインタビュー調査

2.2.1 実施方法

2016年7月9日～10日の2日間、埼玉東萌短期大学で開催された「第21回紙芝居サミット」において、紙芝居講座を実施した埼玉県加須市立志多見小学校6年1組担任の先生、および埼玉県

加須市立志多見幼稚園の主任の先生に半構造化形式でのインタビュー調査を実施した。調査の概要は以下の通りである。

- (1) 実施日時 2016年7月9日（第21回紙芝居サミット1日目）
- (2) 場所 埼玉東萌短期大学5号館クリエイティブホール
- (3) インタビュー対象者
松本浩子先生（埼玉県加須市立志多見小学校教諭 6年1組担任）
石川三佳子先生（埼玉県加須市立志多見幼稚園主任教諭）
- (4) インタビュアー 正司顯好（埼玉東萌短期大学教授）

表2 小学生に対するアンケート質問項目

カテゴリ	質問番号	質問内容	回答選択肢
紙芝居に対する興味関心	1	紙芝居を観ることが楽しいと思いますか	3件法 (楽しい、まあまあ、楽しくない)
	2	紙芝居を演じることが楽しいと思いますか	
	3	紙芝居をつくるのが楽しいと思いますか	
紙芝居に対する特性理解	4	紙芝居と絵本の違いについて理解できましたか	3件法 (よく理解できた、まあまあ、あまり理解できなかった)
	5	紙芝居の特性について理解できましたか	
	6	紙芝居の演じ方について理解できましたか	
	7	紙芝居の創り方について理解できましたか	
紙芝居講座への意欲	8	特別授業（紙芝居講座）の回数は多かったと思いますか	3件法 (多い、ちょうどよい、少ない)
紙芝居による自身の変化	9	特別授業（紙芝居講座）を受けて自分が変わったと思いますか。	3件法 (変わった、まあまあ、変わらない)

表3 小学校及び幼稚園教員へのインタビュー質問項目

質問番号	質問内容	インタビュー対象者
1	「紙芝居を観る」活動によって、生徒（園児）にどのような変化が見られましたか。	松本浩子先生、石川三佳子先生
2	「紙芝居を演じる」活動によって、生徒（園児）にどのような変化が見られましたか。	松本浩子先生、石川三佳子先生
3	「紙芝居を創る」活動によって、生徒（園児）にどのような変化が見られましたか。	松本浩子先生、石川三佳子先生
4	「自作の紙芝居を演じる」活動によって、生徒（園児）にどのような変化が見られましたか。	石川三佳子先生
5	生徒（園児）たちが紙芝居の活動に取り組んだことによる教育的効果についてどのように考えていますか。	松本浩子先生、石川三佳子先生

インタビューは第21回紙芝居サミットの会場で行われ、インタビュアーとインタビュー対象者2名がステージに登壇し、事前に用意した質問に対して答えるという形式で行われた。冒頭でインタビュアーから紙芝居講座の取組についての概要紹介があり、「紙芝居を観る」「紙芝居を演じる」「紙芝居を創る」「自作の紙芝居を演じる」という4つの観点からプログラムが実施され、幼稚園と小学校で実践が行われたことについての説明があった。その後、2名の先生方に対して公開形式でインタビューが実施された。それぞれの質問について、松本浩子先生および石川三佳子先生から口頭での回答が得られた。

2.2.2 質問項目

インタビュアーによって事前に準備された質問

項目を表3に示す。生徒の変容に関する質問を4つ、紙芝居のもつ教育的効果に関する質問を1つで構成した。

3 結果

3.1 小学生によるアンケート結果

紙芝居に対する興味関心についてのアンケート結果を図3、図4、図5に示す。

図3より、紙芝居をみることは楽しいという意見が圧倒的に多かったことがわかる。自由記述による意見では、「紙芝居をみているとわくわくドキドキして楽しい」「観客参加型では自分も参加できて楽しい」「友達と一緒にみたから」などの回答が寄せられた。

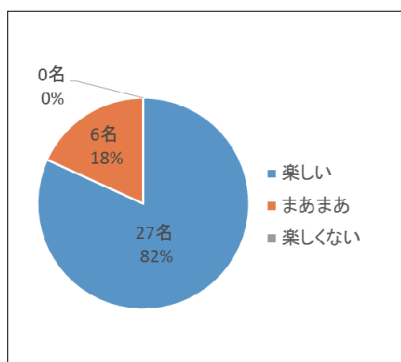


図3 紙芝居を観ることが楽しいと思いますか

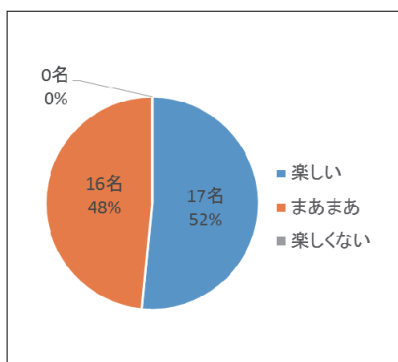


図4 紙芝居を演じることが楽しいと思いますか

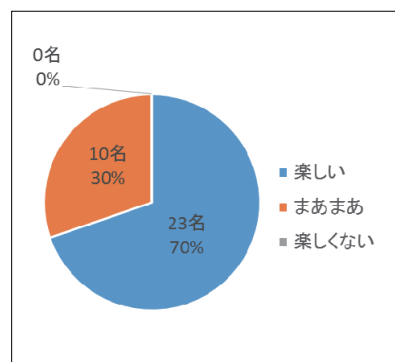


図5 紙芝居をつくるのが楽しいと思いますか

図4より、紙芝居を演じるについては、17名(52%)が楽しい、16名(48%)がまあまあと回答した。自由記述による意見では、その理由として「みんなが喜んでくれる、楽しんでもくれるから」「みんなが笑顔になるから」などの回答が寄せられた。

図5より、紙芝居をつくるについては、23名(70%)が楽しい、10名(30%)がまあまあと回答した。自由記述による意見では、グループで紙芝居をつくった児童は、「みんなで協力してつくったから」「みんなで楽しくできるから」などの回答が寄せられた。

紙芝居に対する特性理解についてのアンケート結果を図6、図7、図8、図9に示す。

図6より、紙芝居と絵本の違いについては、23名(70%)がよく理解できた、10名(30%)がまあまあと回答した。

まあまあと回答したことから、多くの児童がよく理解できたことがわかる。自由記述による意見では、「わかりやすく教えてくれたから」という意見が多かった。

図7より、紙芝居の特性については、5名(15%)がよく理解できた、27名(82%)がまあまあ、1名(3%)があまり理解できなかったと回答した。自由記述による意見では、「人が演じている所をみたからよく理解できた」、「特性を理解することがむずかしかった」といった意見が寄せられた。

図8より、紙芝居の演じ方については、24名(73%)がよく理解できた、9名(27%)がまあまあと回答した。自由記述による意見では、「先生が丁寧に教えてくれたから」と共に、「友達が教えてくれたから」などの回答が寄せられた。

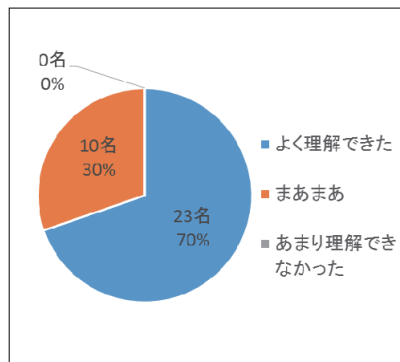


図6 紙芝居と絵本の違いについて理解できましたか

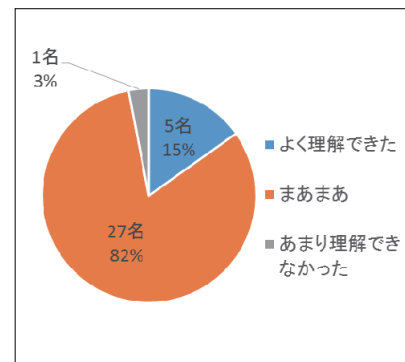


図7 紙芝居の特性について理解できましたか

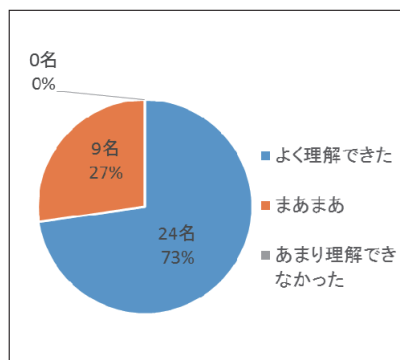


図8 紙芝居の演じ方の違いについて理解できましたか

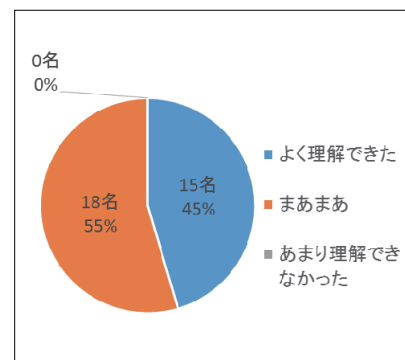


図9 紙芝居の創り方について理解できましたか

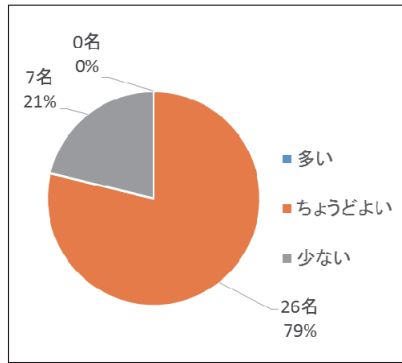


図10 特別授業（紙芝居講座）の回数は多かったと思いますか

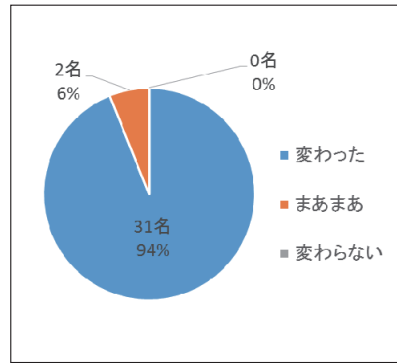


図11 特別授業（紙芝居講座）を受けて自分が変わったと思いますか。

図9より、紙芝居の作り方については、15名（45%）がよく理解できた、18名（55%）がまあまあと回答した。自由記述による意見では、「自分で紙芝居をつくったから」「みんなでやったから」などの回答が寄せられた。

紙芝居講座への意欲についてのアンケート結果を図10に示す。

図10より、紙芝居の特別授業の回数について尋ねた質問では、26名（79%）がちょうどよい、7名（21%）が少ないと回答した。

紙芝居講座を受けたことによる自身の変化についてのアンケート結果を図11に示す。

図11より、31名（94%）が変わった、2名（6%）がまあまあと回答した。つまり、この紙芝居の授業を通して、「自分が変わった」と答えている子どもが多いということである。自由記述による意見では、「紙芝居のことが詳しく理解できて、好きになった。もっと学びたい。」「協力するということが理解できた。（グループで紙芝居をつくったから）」「紙芝居をつくる楽しさや演じる楽しさがわかってよかった。」「友だちとか他の人とももっと仲良くなれそうで人と触れ合うことは大切だとわかった。」「文章をうまく読めるようになった。」「作文をうまく書けるようになった。」「新しく私の出来る事ができた。」といった意見が寄せられた。

3.2 担当教員へのインタビュー結果

表3で示した質問項目に対するインタビュー記

録を、2名の先生ごとに以下に示す。小学校教諭の松本浩子先生は、ある印象的な一人の生徒の行動について詳細に証言をいただいた。質問項目1、質問項目2、質問項目3、質問項目5についての結果を報告する。また、幼稚園教諭の石川三佳子先生は、親子による紙芝居創作の様子とその効果をお話いただいた。質問項目1、質問項目2、質問項目3、質問項目4、質問項目5の結果を報告する。

なお、ポイントとなる重要箇所にはアンダーラインを引き、(ア)～(ス)の記号を付記した。

3.2.1 小学生での教育的効果について

回答者：松本浩子先生（埼玉県加須市立志多見小学校教諭 6年1組担任）

質問項目1：「紙芝居を観る」活動によって、生徒にどのような変化がみられましたか。

回答：それでは一人の生徒に絞ってお話させていただきたいと思います。その女子生徒は身体の大きい生徒で、小さい頃から一年間で30日以上休むという長欠気味の児童でした。私が5年生6年生と2年間担任をしまして、5年生の時は25日欠席をしました。そういう生徒ですので、勉強面でも遅れがち傾向にありました。友達とのかかわりも苦手でした。トラブルを起こすことも多々ありました。

そんな折、正司先生、前徳先生にご来校いただき、紙芝居を生徒たちに演じていただきました。子どもたちの反応はとても喜んで紙芝居を楽しみ

和やかな雰囲気で見ることができました。そんな中、この女子生徒は皆から離れた一番後ろであぐらをかいて座りまして、笑顔もなく何の関心も示さないうで、時おり窓の外を見ながらその時間を過ごしました。^(ア)

質問項目2：「紙芝居を演じる」活動によって、生徒にどのような変化がみられましたか。

回答：紙芝居を演じてみようということになったのですが、その児童はまず勉強が苦手ですので漢字が読めません。普通ですと読めない漢字が多いのですが、紙芝居の場合は脚本がほとんどひらがなですので、紙芝居を自分で手に取って下読みしている様子が見られました。^(イ) グループで一作品を演じるレッスンでしたので、友達とのかかわりはうまくいきませんが、紙芝居に対する関心は高まっていったようです。

質問項目3：「紙芝居を創る」活動によって、生徒にどのような変化がみられましたか。

回答：この生徒が大きく変化したのは手作り紙芝居を作って演じるという段階においてです。^(ウ)

この子は絵を書くことが好きで、上手下手は別として絵をかくことを楽しむという傾向が強かったです。クラブは絵画工作クラブに入っていて、紙芝居を創るということになったときに、少し顔色が明るく変わったように思います。^(エ) 紙芝居を数人のグループでつくる子もいれば一人でつくる子もいて、彼女は友達とコミュニケーションがまだまだ取れませんでしたので、一人で紙芝居を創ることを選択しました。数人のグループで作った生徒たちはそれぞれの役割分担を決めて制作したのですが、個人で創る子はどうするのかなと様子を見ていたら、何人か個人で制作する子どもがいて、その子たちが机をならべて自分の作品の内容を話しながら制作するという形になりました。

^(オ) 紙芝居を作って演じるという期日が定められていたのですが、宿題もなかなか約束どおり提出できないところがありましたので、私は紙芝居の提出も難しいかなと心配していました。前日にも

かかわらず紙芝居が未完成で、家に持ち帰って完成しなければならないという状況でした。私の方では半信半疑でもしかしたら完成できないかもしれないという不安もありました。次の日紙芝居を演じる当日がきたのですが、朝、保護者の方から電話が入りまして、体調を崩したので今日はお休みをしますということでした。お父さんの方から電話があったのですが、私はやっぱり完成しなかったのかなという思いもあり、お父さんに「今日は紙芝居を演じる日なのですが、もしかしたら紙芝居ができませんでしたかね？」とお伺いしたところ、お父さんから「昨日頑張って紙芝居は完成させたんだよ。それで体調を崩して今日は学校にいけないんだよ、先生。」「じゃあせつかく紙芝居を作ったのなら、3時間目に間に合うように来られないですか？」と促したところ、「本人に確認をします」ということで、「じゃあ紙芝居だけ演じるために学校に行かせます。」ということになりました。そこで今度はお母さんに学校に送ってもらって、正司先生や前徳先生、クラスメイトの前で演じて、その後お母さんと帰宅するということになりました。それまですべてに中途半端な状態で何かを完成させるということはなかったのですが、今回紙芝居を完成させて、皆の前で演じきったということがクラスの仲間たちに対してもよい影響を与え、クラスから認められるきっかけになりました。正司先生、前徳先生からも紙芝居を作ったことと演じきったことに対し、褒められ認められたので、本人はとても嬉しそうな表情で帰っていきました。

この出来事が本人の自信につながったのか、日常の宿題や課題についても少しずつ積極的に取り組めるように変わってきました。漢字なども自分のできる範囲で覚えようとしていく姿が見られるようになりました。またクラスの中でも関わりがずいぶん増えてきて、いろいろな行事に積極的に参加できるようになりました。6年生の最後に下級生の一年生や幼稚園の園児に紙芝居を演じようという段階でも、積極的に手を挙げて発言するようになりました。紙芝居の演じ方だけではな

く、1・2年生がクラスに入退場するときに、6年生全員が手でアーチをこしらえて下級生がその中をくぐったらどうかという提案を彼女がしてくれました。そんないろいろな意見を出してくれるように変わっていきました。

紙芝居の実演が終わったあとも、下級生が自分たちも演じてみたいという申し出にも積極的にかかわって、親切に紙芝居の舞台の開け方や紙芝居の抜き方についてやさしく指導している姿が見られました。^(カ)最終的に卒業するときには、卒業式にも出られて今現在中学校の方に進学して、女子柔道部で活躍しています。学校を休むことなく楽しく積極的に学校生活を送っているという報告をいただいております。

質問項目5：生徒たちが紙芝居の活動に取り組んだことによる教育的効果についてどのように考えていますか。

回答：小学生に対するアンケート調査で、自分については、31名(94%)が変わった、2名(6%)がまあまあと回答している(図11)ことに担任として驚いています。紙芝居が生徒たちに与えた教育的効果は、確かにあったと言えると思います。^(キ)どの生徒も紙芝居の時間が好きでしたし、とても楽しみにしていました。紙芝居に関わることで他の授業での教科書の朗読が上達したり、文章力が向上したり、人前で話せなかった生徒が少しずつ話せるようになったりということがありました。遅刻の回数が減ったという生徒もいました。^(ク)

3.2.2 幼稚園での教育的効果について

回答者：石川三佳子先生（埼玉県加須市立志多見幼稚園主任教諭）

質問項目1：「紙芝居を観る」活動によって、園児にどのような変化がみられましたか。

回答：正司先生、前徳先生にお越しいただき実際に実演していただいて、教師自身が紙芝居に対する理解を深めることができました。^(ケ)舞台を使って紙芝居を演じることの大切さ、何度かの下読

みによって作品世界を深く理解することの大切さ、等々を学ばせていただきました。実演により、作品世界に子どもたちが引き込まれていく様子を目の前で体験させていただくことにより、紙芝居の教育的な効果を理解することができました。^(コ)

質問項目2：「紙芝居を演じる」活動によって、園児にどのような変化がみられましたか。

回答：幼稚園児には紙芝居を演じるのが難しいのですが、一枚紙芝居というのを手作りで制作して、演じるようにしました。子どもたちは、拍子木を使った紙芝居の実演が大好きで、自分で描いた絵の裏側に、自分の想いを両親や先生に聞いてもらって、文字の書けない子どもについては代わって書いてもらうという、一枚紙芝居を作りました。演じた後は、「すごいね、〇〇ちゃん。そんなことがあったんだ。」という会話も弾んで、和やかな雰囲気一枚紙芝居を楽しむことができました。^(カ)

質問項目3：「紙芝居を創る」活動によって、園児にどのような変化がみられましたか。

回答：夏休み前に保護者の方にも主旨を説明して、起承転結の4枚紙芝居を親子で作ってもらいました。これはそれぞれの親子にとってとても貴重な経験になったようです。紙芝居を一緒につくるプロセスの中で、自分の子どもの未知の感性に気付かされたり普段の我が子の想いに思いがけず触れることのできるよい機会になったという感想が多く寄せられました。

質問項目4：「自作の紙芝居を演じる」活動によって、園児にどのような変化がみられましたか。

回答：3学期の卒園前の発表会で親子による紙芝居の実演をしていただきました。基本的な紙芝居の演じ方については、正司先生からいただいた資料に基づいて保護者宛ての説明を一応させていただいたのですが、各家庭で相談して登場人物の演じ分けを親子で分担した演じ方も実際にたくさん

ありました。お互いにアイコンタクトを取りながら息を合わせてぴったりのタイミングで丁寧に演じている姿が見られました。小学生の皆さんにもお越しいただいての実演になりましたが、観客席にもとてもあたたかい空気が流れ、和やかな雰囲気の中での実演会になりました。⁽²⁾ 子どもたちも演じ終わってとても満足そうな表情をしていたことが忘れられません。緊張もあったと思うのですが、さわやかな感動というのでしょうか、そういうものを私自身も実感することができました。それに対し、正司先生からもお褒めの言葉をいただき、そのことが園児たちのとても大きな自信と達成感につながったと思います。

質問項目5：生徒たちが紙芝居の活動に取り組んだことによる教育的効果についてどのように考えていますか。

回答：正司先生、前徳先生にお越しいただき、紙芝居の実演をしていただき子どもたち全員で見せていただくだけでもとても楽しい時間なのですが、親子で手づくり紙芝居に関わることで双方に教育的効果が表れたように思います。⁽³⁾

4 考察

4.1 小学生によるアンケート結果に対する考察

紙芝居の興味関心についての3つの質問結果によると、児童は紙芝居を観ることも演じることも創ることも、「楽しい」と感じたという意見が多く、否定的な回答は無かった。これは、紙芝居の特性である作品が飛び出して広がる世界を体験したり、共感の世界を体験することを「楽しい」と感じているのではないかと推測される。また、生徒自身が演じることによって、皆が良い反応を返してくれることが、「楽しい」につながっていることも考えられる。さらに創作活動においては、個人で紙芝居をつくった児童もいるが、「お話を考えるのが楽しい」「絵を描くことが楽しい」「どんな作品ができるのかドキドキする」など、自分で考え、創ること、自分の作品ができることへの

楽しさもあると思われる。これに加えて、皆で意見を出し合い、協力して活動できたことが「楽しい」につながっているのではないであろうか。

紙芝居の特性理解についての4つの質問結果によると、紙芝居と絵本の違い(図6)、紙芝居の演じ方の違い(図8)、紙芝居の創り方の違い(図9)は肯定的な意見が多かった。紙芝居と絵本の違いについては、実際に絵本と紙芝居を使って説明したことが理解へとつながったと思われる。紙芝居の演じ方や創り方については、グループでディスカッションをしながらの創作活動であったため、理解が深められた可能性がある。一方で、紙芝居の特性の違い(図7)についてはまあまあという意見が多数を占めた。絵本と紙芝居の特性という言葉がやや難しかった可能性もある。

紙芝居講座の授業回数としては全体的にちょうどよいと感じていたが、一部の児童はもっと紙芝居活動を増やしてほしいと感じており、紙芝居への意欲が高まったと思われる。

紙芝居による自身の変化についての質問では、多くの児童が「変わった」と答えており、自由記述の結果からも、紙芝居に対する興味関心だけでなく、友人と協力する楽しさや文章をうまく書けることになったことに対する喜び、そして自分が変わったという実感をコメントしてくれた児童もいた。紙芝居の教育的効果が児童自身から多数語られたことは興味深い。

4.2 小学生での教育的効果についてのインタビュー結果に対する考察

担当教員へのインタビューにより、一人の女子児童が「紙芝居を観る」「紙芝居を演じる」「紙芝居を創る」「自作の紙芝居を演じる」という4つのプログラムを経験していく中で、変化していく様子が鮮明に語られた。

「紙芝居を観る」の活動では、女子児童は(ア)のようにあまり関心を示していない様子ではあったが、「紙芝居を演じる」の活動では、(イ)のように紙芝居に興味をもち始めたことがわかる。これは、紙芝居の脚本がひらがなであることから、

「自分にもできそうだ」「やってみたい」という自発的な思いが生じたのではないかと推測される。「やってみたい」と思うことは、学びの始まりである。清水（2007）は、「大きい子の中には、『紙芝居は小さい子のもの』だと思い、敬遠する傾向がみられる」と述べているが、この女子生徒にとっては、「小さい子のもの」というイメージが「自分にもできる」という思いにつながったのではないかと考えられる。

「紙芝居を創る」という活動において、(ウ)のように女子児童は大きく変化することになる。その理由としては(エ)で語られているように、女子児童にとって絵を描くことは得意なこと、好きなことであり、まさに手作り紙芝居は自分の自信がもてる分野であり、やりたいことであったことと関係していると思われる。女子児童は「紙芝居を創る」という活動の中で、自分の活動を振り返り考えることや自己表現をすることの楽しさを学んでいったのではないかと考える。また、(オ)のように、他者が制作する作品についての話を聞くことにより、他者の視点を知ったり気付いたりすることができたのではないだろうか。

そしてさらに、「自作の紙芝居を演じる」という活動において、女子児童には(カ)のような姿が見られるようになった。女子児童にとって自己表現をすることは苦手であるという意識があったと思われるが、自作の紙芝居を創り、演じることができたことで、他者に認められ、そのことが自信へとつながり、積極的な行動が増えたのではないかと考えられる。鬢櫛ら（2014）は紙芝居作りについて「自分自身と向き合うことを楽しみ、同時に、他者の表現（作品等）を鑑賞したり、自分との違いに気付いて受け入れ合う関係づくり」と述べている。まさにこの女子児童は、人前で自分の意見を言えるようになったり、(カ)のように「下級生が自分たちも演じてみたいという申し出にも積極的にかかわって、親切に紙芝居の舞台の開け方や紙芝居の抜き方についてやさしく指導している姿」が見られるように変わったのである。

「自分が変わった」ことについての具体的状況

については、(キ) (ク)で語られているように、児童たちの物ごとへの関わりや人との関わりが、自発的能動的に変化したという意味である。今回行われたプログラムの活動が、鬢櫛ら（2014）が指摘しているように「紙芝居の特性に見合った活動」であったことと関係していると思われる。

4.3 幼稚園での教育的効果についてのインタビュー結果に対する考察

(ケ)で語られているように、教師が子どもと一緒に、「紙芝居を観る」ことで、教師自身が紙芝居を深く理解することができたという点は重要である。鬢櫛ら（2014）は手作り紙芝居を行う意義について、「保育実践者である教師が紙芝居を魅力的なものと捉え、それを子どもとともに楽しみたいと考えていることが見て取れる。倉橋惣三の自分が好きなことは子どもにさせてあげたいという考え方が、この手作り紙芝居保育の指導法の根底にある。紙芝居の魅力をまず幼児教育者・保育者が知り、保育に導入するようにすべきである。」と指摘している。教師自身がまず紙芝居に興味をもち、体験し、深く理解し、魅力を感じることは、保育を行っていく上でとても大切なことであると考えられる。

(コ)のように、子どもたちが紙芝居作品に引き込まれる理由として、紙芝居がもつ特性や印象に深く関係しているのではないかとと思われる。紙芝居のもつ特性として、藤田（2013）は、「紙芝居の特性は『集団の理解』『共感』と捉えておく。」と述べ、「心地よい『場』の提供は紙芝居の特性であり、役割でもある。」とも指摘している。また紙芝居の印象については、大元（2013）が学生に対して行った紙芝居についてのアンケート調査の中で、「紙芝居は『特別な時間、場所で読まれることが多かった』ことから『特別感があった』という記憶や、その『特別感』から紙芝居に『ワクワクした』という思い出のある学生がいた。小学生の頃の思い出も『お話の部屋みたいなのところによく聞きに行っていました』や『何かの行事がある時に紙芝居があった』というように特別

の時間、特別な場所と相まって紙芝居が記憶されているということが多々あるように思われる。特別な時間と特別な場所で観る紙芝居というところからも、紙芝居に対する非日常的な楽しみが感じ取られる。」と報告している。

「紙芝居を演じる」の活動では、まずは一枚紙芝居を手作りで制作して演じてもらった。その活動には(サ)のように両親や保育者との関わりがある。このように、幼児の手作り紙芝居には、大人が寄り添い思いを共感していく作業が必要である。園児たちは大人とのやりとりの中で、自分を表現し、受け入れてもらうという体験を通して自信へとつながり、自発的な行動や態度につながっていくものと思われる。また、和やかな雰囲気の中で、同年齢の友達の作品をみたり話を聞いたりする中で、自分との違いや他者の思いを受け入れる体験をすることが他者理解へとつながっていくのではないだろうか。

「紙芝居を創る」の活動では、自分の子どもにこんな感性や思いがあったのかと、親が初めて気がついたという体験談が寄せられた。親が子どもに寄り添い、子どもにとっても自分の思いや表現を親に受け入れてもらえるという体験につながり、双方に対して良い効果が認められた。

「自作の紙芝居を演じる」の活動では、親子での実演ということで、息を合わせながらアイコンタクトをとる姿も見られ、とても丁寧に実演が行われた。また、(シ)のように小学生も実演会に参加することで、観客席にもとてもあたたかい空気が流れ、発表した親子が周囲に温かく受け入れられ、和やかな雰囲気の中での実演会となった。

このように、(ス)で語られたように親子双方に教育的効果が表れたことは興味深い。

5 まとめと今後の課題

本研究は、2015年に開催された「第20回紙芝居サミット」、および2016年に開催された「第21回紙芝居サミット」で発表された、紙芝居と教育における可能性に関する一連の調査研究をま

とめたものである。「幼小連携による紙芝居創作と実演プログラムの実践」「小学校教諭と幼稚園主任教諭との座談会」などから明らかになった紙芝居による教育効果は、紙芝居の特性である演じ手と観客の「共感の世界」はもちろんのこと、「三面舞台を使い、ぬきさしができ、作品世界が飛び出してひろがる」「画面が1枚1枚ばらばらであること」「画面の表が絵で裏が文字であること」などの特性が全て影響し、教育効果につながっているものであると考えられる。

志多見小学校で実践された紙芝居創作と実演プログラムにより、小学生児童や園児たちには多くの教育的効果が認められた。小学6年生の児童が、低学年児童や幼稚園児、その保護者たちを前にして自作の紙芝居を演じている姿は誇らしく、嬉しく、自信に満ちていたように思われる。また、幼稚園児の「自分たちもやってみたい」という気持ちを小学生が受け入れて、優しく教えてあげるという行動につながったのは、他者理解や他者とのコミュニケーションが自発的にできるように成長したからとも受け取れる。

清水(2007)は、「2～3歳の時期を対象とする紙芝居の分野では、家庭教育における『乳幼児期の自助力の育み』に焦点を絞って作成を考へてもいいのではないだろうか」とし、乳幼児向けの家庭教育教材としての可能性を述べている。今後は幼小に留まらず、保幼小連携の中での紙芝居導入し、紙芝居講座プログラムを実践してみることや、地域の親子を対象に活動を展開することなども効果的であると思われる。小学校、幼稚園、保育園、それぞれの中での紙芝居講座プログラムを考案し、実践することで、さらなる教育的効果の検討を行っていきたい。

今回の研究で明らかになった小学生による紙芝居創作の教育的効果や、幼稚園における親子紙芝居の創作における教育的効果については、さらなる実践を重ね、どのような作品が創作され、それが児童や親子にどのような影響を与えたのか、より詳細に検討する必要があると思われる。また、紙芝居の教育的効果は、実演するだけで十分な

か、それとも今回のような創作プログラムを組み込むことでより高められるのかについても調査が必要である。

する一考察, 広島文教教育 27, pp23-35

謝辞

第21回紙芝居サミットでのインタビューに快くご協力いただいた埼玉県加須市立志多見小学校の松本浩子教諭、及び埼玉県加須市立志多見幼稚園の石川三佳子主任教諭に感謝申し上げます。また、アンケートにご協力いただいた埼玉県加須市立志多見小学校6年生の皆さん、ありがとうございました。

(注)

- 1) 紙芝居文化の会 (2017) 『紙芝居百科』, 童心社, pp126-135

前徳明子 (埼玉東萌短期大学准教授)
正司顯好 (埼玉東萌短期大学教授)
渡邊 裕 (埼玉東萌短期大学専任講師)

参考文献・引用文献

- 大元千種 (2013) 保育現場における紙芝居の活用の課題—保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして—, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 8, pp177-188
- 鬢櫛久美子・野崎真琴 (2010) 保育現場における紙芝居の活用状況, 名古屋柳城短期大学研究紀要 32, pp65-75
- 鬢櫛久美子・岡野尚子 (2014) 保育における手作り紙芝居—指導方法を探る—, 名古屋柳城短期大学研究紀要 36, pp19-28
- 寶櫛久美子 (2015) 紙芝居研究の現状と課題, 子ども社会研究 21号, pp185-202
- 栗原裕一 (2002) 紙芝居で育てる表現力, 実践国語研究第 235号, pp93-96
- 清水美智子 (2007) 紙芝居「演じることと語ること」: 紙芝居のもつ特徴と効果を探る (研究ノート), 名古屋柳城短期大学紀要 29, pp39-48
- 正司顯好 (2015) 紙芝居の現状と課題—幼児教育における可能性—埼玉県幼稚園・保育園を中心に実施したアンケート調査に基づいて—, 小池学園研究紀要第 13号, pp13-23
- 正司顯好・前徳明子 (2015) 教育における紙芝居の可能性を考える—幼小連携を基軸として—, 小池学園研究紀要第 13号, pp35-44
- 藤田由美子 (2013) 保育における紙芝居活用に関